

1780年代のル・アーヴル港拡張計画について

A Study on the Extension Project of the Port of Le Havre in the 1780's

根岸 美幸**

By Miyuki NEGISHI

概要：海港都市ル・アーヴルでは、17世紀以来、人口増や商業活動の成長により都市域の拡張や港湾施設の整備の実現が切望されていた。1776年にこの都市の港湾管理が土木局に委託され、軍事技師や土木技師、科学アカデミー会員らにより様々な計画が提案され、審議された。本稿では計画案の整理検討を通して、公共建設活動にかかわる専門集団の特質を提示するとともに、自然条件や海洋輸送業の実態に即した停泊地や水門を計画し、都市の商業活動を優先することによって都市行政の支持を受けた土木局の方向性を検証する。

1. 初めに

(1) ル・アーヴル港整備へのまなざし

セーヌ川河口の港町ル・アーヴルは、フランソワ1世時代に港の入り口とヴィダム塔が建設されて以来、地の利を活用し商業輸送で発展した。ルイ14世治下、コルベールはこの港町の重要性を認識し、ヴォーバン元帥に計画させてアルフル運河、砂州の水門、そして水路内の洗浄も実施させた。この町で活動する大商人らは港の拡張をかねてから懇願していたが、政治的理由から着手に至らなかった。

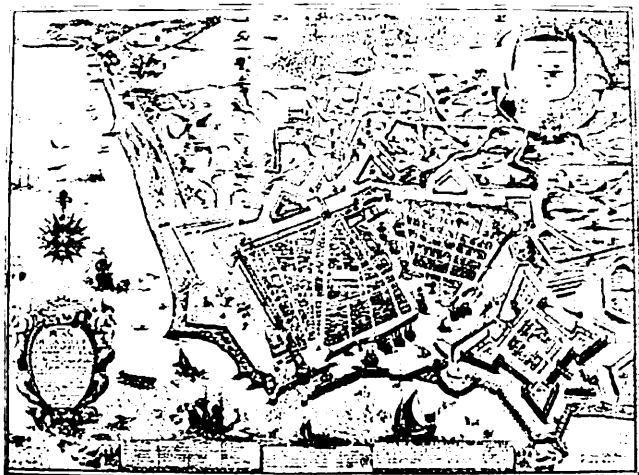


図-1 ル・アーヴル都市図 (1673年)¹

(Fig. 1. Plan of Le Havre, 1673.)

海洋商業の拠点として商取引も人口も増大していたこの都市は、七年戦争の際、英国軍に包囲され爆撃を受ける。都市整備を具体化する理由が揃い、1776年8月よりル・アーヴル港が財務総監の管轄下になると、その翌年、ルアン徴税管区の主任技師ド・セサルが土木局委員会にて港湾施設と都市域拡張の計画を示した。土木局の技師、軍事技師のみならず科学アカデミー会員へも意見を

求め、修正を加えながら検討が繰り返され、1787年に土木技師ラマンデの計画が採用された。この計画を用いて工事が開始されたものの、大革命の勃発を迎え、1792年には大幅な修正を余技なくされた。

(2) 研究の目的と方法

本稿が扱う1777年から1787年の時期は、アンシャン・レジーム末期、ルイ16世治下でテュルゴ失脚後の王政改革が試みられていた。土木局からみると、このル・アーヴルの仕事はダンケルク港再建とほぼ同時期に進行しており、土木局が軍港から商用港へと方向転換を狙う港湾都市の将来を託された重要な案件である。計画審議の段階でも土木技師と軍事技師の計画を比較する形で議論が進行し、商業活動を優先させた海港都市の意見が尊重される形となった。ル・アーヴルの都市計画を対象とする歴史研究は多数あるが、本研究との関連上、土木技師ラマンデや請負業者チボーを扱ったルモニエ・メルシエ Aline Memonnier-Mercier の研究を挙げておく²。18世紀の都市史における技師や建設請負業者の役割を検証する研究の進展は、近代都市のインフラ整備を建設活動に関わる社会集団の役割から見直す契機となろう。

本稿においては、この1780年代に議論された工事計画を比較検討し、アンシャン・レジーム末期の海港都市における都市基盤整備の特性を明らかにすると共に、ダンケルクと同様、軍事技師よりも都市住民との共同者として土木技師が選択された理由を考察する。史料はフランス国立土木学校および海軍文書館所蔵の土木技師によるメモワール、書簡、図面などの一次史料を中心に用いる。

2. 1780年代の都市整備計画

(1) 土木局総視察官デュボワ Dubois の計画

表-1 は土木局の発案から始まった港湾整備計画を時

*Keyword：港湾工事、土木局、ル・アーヴル

**工博

(〒330-0052 埼玉県さいたま市浦和区本太1-9-1)

系列にまとめたものである。

(1778/07/04)土木技師デュボワ、メモワール作成
(1779/01/10)デュボワの計画が承認される
(1779/06/11)要塞管理官フルクロワへ計画送付
(1779/07/27)フルクロワ、メモワール作成
-要塞監督官レジエの計画
(1781/08/08)大臣、他部局へ質問送付
(1782/01)ド・セサル、計画およびメモワール提出
(1782/07/13)ボヴロン公とド・ラ・ミリエール、デュボワの最初の計画を検討するためにル・アーヴルへ向かう
(1782/09/08)アカデミー会員ド・ゴールの意見書作成
-アカデミー会員ド・ゴール、ド・ブレソルの計画
-デュボワの第2計画
(1783/08/15)アカデミー会員の第2報告
(1785/04/15)土木局委員会、主任技師ラマンデが提案した開い堀建設を承認
(1786/06/27)ラマンデ、計画提出
(1787/01/28)土木局委員会で審議、承認
(1787/02/02)大臣の委員会で承認

表-1 アンシャン・レジーム末期の港湾計画年表
(Table. 1 Chronological Table of the Projet for the Port in the Last of Ancien Régime)

土木局の技師により開始された計画とはいえ、ル・アーヴルの工事計画は軍事技師や海軍技師、科学アカデミーなど土工建築の知識をもつ専門社団との論議を通過した上で最終案に至った。本章では土木局のルアン徴税管区担当主任技師、ラマンデ Lamandé 作成の刊行史料『ル・アーヴル港整備および拡張のために提案された様々な計画についてのメモワール』³に添付の図面を示しながら、各案の特徴と提案者の関係について検討を進める。

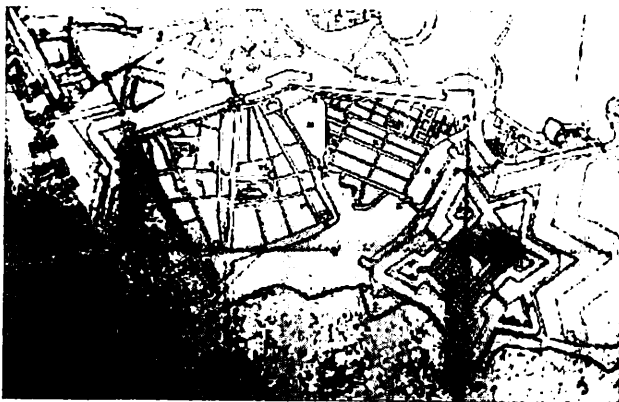


図-2 1778年当時のル・アーヴル⁴
(Fig. 2 Plan of Le Havre, 1778)

当時ルアン徴税管区主任技師であったド・セサル de Cessart が土木局総視察官デュボワが最初に提出した計画は南側防波堤を延長し、湾口砂州上に外港を建設している。市街地の拡張は 45000 トワーズで、外港と市街地以外は手を加えていない。市街地の拡張部分と要塞の同調について確認するため、大臣はこの計画を要塞管理官フルクロワ de Fourcroy へ送付し、意見を求めた。

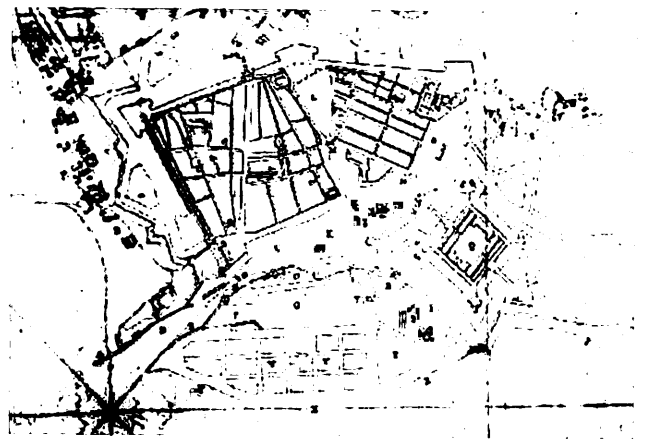


図-3 1779年の土木局案⁵
(Fig. 3 Plan of Le Havre, approved by Assemblée des Ponts et Chaussées, January 16 1779)

ここでルイ 16 世がモンバレイ公、大臣と艦隊長兼海軍技師長グロニャール Grogard が共に様々な工事計画を検討し、市民および軍の利益に最適な計画を望んだため、全員でル・アーヴルへ赴き、フルクロワは同年 7 月 27 日にメモワールを提出した。

このメモワールではル・アーヴル港が商用港としての機能を優先して考えられていること、一方で停泊地が不足しており、利用船舶数を倍増して商業活動を定着させること、停泊地の拡張と防御施設の縮小が要請されている。加えて都市人口の急増に対応するため市街地面積を倍増させる必要があるうえ⁶、都市や港湾、および艦船の安全確保のために活動する駐屯部隊が 5-6 週間滞在できる土地の確保も主張された。

(2) レジエ Léger の計画

フルクロワのメモワールが発表された後に要塞総監督官レジエが提出した計画は、港と水路を今までの状態のまま保存している。

1780 年の報告書(無記名)では最初の土木局案ではレジエ案はフルクロワのメモワールと土木局案でシエされた変更に従って修正されたこと、1200 万リーヴルの費用が 600 万リーヴルに半減したことが指摘されている。また土木局への提案やオンフルールからオックを結ぶ運河計画、城砦不要の説明なども記された。停泊地に大型艦船を投錨させ、都市防御と商業活動の両面において有効な港湾整備が提案されている。

輸送量拡大と人口増に対応した港湾整備の方向性はなかなか定まらなかった。翌年、1781 年 8 月 8 日、ル・アーヴルの港と都市拡張の理念を確認するため、大臣は他部局へ質問状を送付する。商業と軍事どちらを優先させるべきか、これまでの計画案における都市拡張の面積は十分なものか、といった質問に対し、それぞれ回答が得られた。特に商業取引量の倍増や、バルティック商業による商業拡大、都市域、港、停泊地の面積の倍増、が指摘された。一方で軍事視点からの提案もあった。

このような助言を得て、同年 8 月に財務総監は土木局案と軍事技師案を比較し、土地の利点について理解があ

り、水路を経済的かつ有効に利用するための放水にかんする提案といった点から、土木局の提案を評価した。

(3)土木局主任技師ド・セサル案

1782年1月付のド・セサールの提案は面積17000トワーズの外港と、空積み石の上に建造する18000トワーズの貯水池、それに港の場所にある商業停泊地に20000トワーズが配分されていた。市街地拡張は空積石と南の湾口砂州の上に計画され、その周囲は要塞で囲まれている。空積石の部分の商業用停泊地は5500トワーズ、都市拡張部分は合計34470トワーズになった。⁷

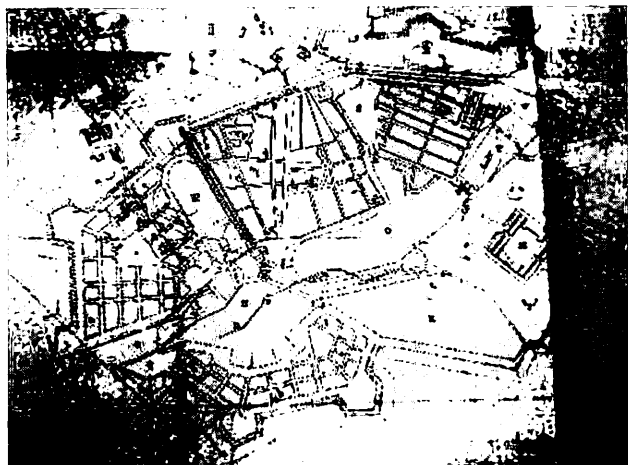


図-4 土木技師ド・セサル案⁸

(Fig. 4 Plan of Le Havre, proposed by M. de Cessart, 1782)

デュボワはこのド・セサル案に不賛成であり、同年7月、ボヴロン侯と土木局局长ド・ラ・ミリエール De La Millière はデュボワの第1案を検討するため、委員会を組織してル・アーヴルに赴き、討議を行った。この結果、同年9月8日付でド・ゴール de Gault が意見書を提出し、南側の防波堤の延長が入港に不便であること、出港時に水路の水門で船舶が破損する恐れがあることなどを指摘した。

しかし土木局案は議会裁定で採用され、城砦が都市防衛にとっては有用ではない方法で保持されることが同意された。陸軍はこの決定に納得しなかったため、大臣は科学アカデミー会員4名に計画検討を依頼する。

(4)科学アカデミー会員、ド・ゴールとド・ブレソル de Bressol の計画

依頼を受けたアカデミー会員らは検討結果の報告書を提出するとともに、彼らのうち2名、ド・ゴールとド・ブレソルは新たな計画案を提示した。水路幅が従来の2倍になり、南側の湾口砂州にも新たに水路を開設している。商用停泊地は貯水池と繋がり、外港の東側にある水門で隔てられている。そして砂州の場所にある王室海軍用に新たな停泊地が計画された。デュボワはこのアカデミー会員の報告書について、彼らの見解と一致したいと考えて覚書を作成した。

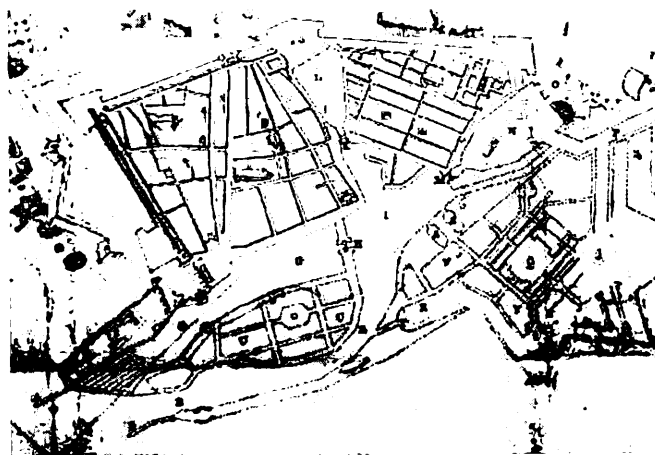


図-5 科学アカデミー案⁹

(Fig. 5 Plan of Le Havre, proposed by M. de Gaule and M. de Bressol, Commissaires of the Académie Royale des sciences de Paris)

(5)デュボワ第2案

デュボワはこの覚書において新たな計画案を示した。突堤と現在の水路を保存し、破壊した要塞の正面に都市域拡張を行い、商業停泊地を展開させた。また王の停泊地と王立海軍用作業場は、砂州の奥に設定している。そしてこの停泊地には港に入口をもち、セヌ川沿岸のオックに達する運河を新設させた。

1783年8月15日、科学アカデミー会員はこのデュボワの第2案について政府へ2回目の報告を行った。港の入口の提案や港の拡張方法には賛同するものの、放水の水門の位置（南側防波堤の中）や建設費用については難色を示した。結論としてデュボワ第2案は不採用となり、工事計画は一時中断された。しかし現実には港内に堆積する砂利の除去などに対応するため、土木技師は既出の計画を総合して検討し、城砦の破壊を含めた計画が大臣全員に承認を受けた。こうして、貯水池の壁面と南側防波堤の工事が開始された。1784年2月、土木技師は貯水池が沖積土を除去する十分な広さがないと指摘し、同年9月にカストリ元帥、ルアン地方長官、ド・ラ・ミリエール他により貯水池拡張が討議される。

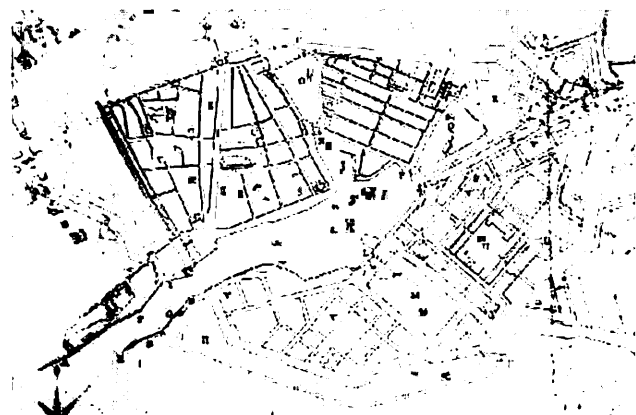


図-6 デュボワ第2案¹⁰

(Fig. 6 Plan of Le Havre, proposed bay Dubois, approved 1782)

この結果貯水池拡張と内部の壁を延長し城壁を建設することが決定された。これに伴い土木局委員会は1785

年4月15日、開い堀の建設を承認した。

(6)土木局主任技師ラマンデ案

ルアン徴税管区の主任技師ラマンデは1782年の就任直後に、ディエップの港湾工事を担当していたランブラルディーLamblardieをル・アーヴルに召還し、この港湾工事専任の主任技師に任命させていた。1786年6月27日に彼が提出した計画では、南側の水路水門の位置を砂利の除去に有効な位置に変更すること、貯水池の大幅な拡張、砂州上の乗り上げ停泊地、10500 トワーズ（約25000m²）の都市域拡張などが提案された。



図-7 土木技師ラマンデ案¹¹

(Fig.7 Plan du Port du Havre, by Lamandé)

このラマンデ案はル・アーヴルの市と商業会議所に送付された後、地方長官の委員会および土木局委員会で審議され、次に陸軍と海軍の両部局で検討され、1787年1月28日に再度土木局委員会で承認された後、同年2月2日の大臣の委員会で最終的に決定された。

3. 土木技師の位置づけ

(1)技師ラマンデの報告

主任技師ラマンデの報告では、水路や貯水池の幅と潮汐の関係、波の高さや風向きといった自然条件や入港する船舶数と喫水の問題を取り上げて、既出の計画案を批評している。また水路や港内に堆積しがちな砂利の除去への対応や、商業輸送における積荷の安全管理にも配慮した叙述があり、港湾施設の管理者として商人や船長らとの接触が推察される。

(2)都市行政との関係

1781年3月の時点では、1776年の決定にもかかわらず、土木局内ではル・アーヴルでは陸軍大臣と工兵団が工事を掌握していると考えられていた¹²。要塞取り壊しについても土木局委員会はこの問題は大臣間で決定すべきと考え、セギュール元帥に要請した。

では都市住民は軍事技師と土木技師のどちらを支持していたのだろうか。ダンケルク港再建の事例と比較すると、近隣都市住民による軍事技師に傾倒した誓願運動は筆者はル・アーヴルにおいてはまだ確認していない。1790年に土木局局長ド・ラ・ミリエールが発表したメモワ

ルでは、セヌ・アンフェリユール県執行部の書簡¹³を引用し、土木局が商用港の維持管理をする正当性を主張する。この県執行部の文書によると、軍事技師は都市の商業活動よりも平時は要塞の維持管理、有事の際は要地の防御を優先するため、商業利益を念頭においた港湾管理を希望する都市住民との乖離があると指摘している。

4. 終わりに

本稿では土木局の技師が関わったアンシエン・レジーム末期のル・アーヴル港および都市域の拡張計画より、経済発展に対応した港湾都市の方向性について考察した。要塞の破壊と停泊地拡張はこの都市の経済成長を端的に物語るが、軍事技師と土木技師の提案を十分に比較検討することにより、建設事業を指導していた当時の技師団の基本的な理念や地域社会との関係は明確になる。現在、海軍文書の調査を進めているが、ル・アーヴル港にかんして軍事技師の主張を確認できる史料は未確認であり、今度の課題である。また、商業会議所の発言力は商用港の計画を実務上責任を負う土木局の技師の意思決定に大きく関係すると考えられるが、セヌ・マリティーム県文書館所蔵の商業会議所文書の検討を進めて地方行政における港湾・都市整備の理念を検証したいと考える。

¹ Service Historique de la Défense, Département de la Marine, DD/2/831, Plan de la ville et citadelle du havre de Grâce, 1673.

² Aline Lemonnier-Mercier, « François Laurent Lamandé et les ingénieurs au Havre au XVIII^e siècle », *Cahiers Havraise de Recherche Historique*, no 64, 2006, pp.55-76 ; id., « Grandeur et décadence d'une famille d'entrepreneurs architectes au XVIII^e siècle : les Thibault », *op.cit.*, no 65, 2007, pp.227-252. また近年の研究として、Olivier Chaline, « L'image d'un port : Le Havre vers 1760 », *Etudes Normandes*, no 1, 1988, pp.51-68 ; Nicolas Verdier, « Variations sur le territoire. Analyse comparée de travaux urbains : Le Havre 1789-1894 », *Annales. Économie et Sciences sociales*, 57-4, 2002, pp.1031-1065.

³ ENPC, Ms 4-6528, Lamandé, *Mémoire sur les divers projets proposés pour l'amélioration & l'agrandissement du Port du Havre*, Rouen, de l'Imprimerie de Louis Oursel, 1791. このメモワールは1787年の最終案が革命期に修正するべく議論された時期に作成されており、工事計画の経緯を分析し今後の方向性を確認する目的があったものと推測される。このメモワールには1787年ラマンデ案の図面は掲載されていないため、本稿では海軍文書館に所蔵の図面（彩色）を使用した。

⁴ ENPC, Ms 4-6528, Lamandé, *Op.cit.*

⁵ *Ibid.*

⁶ 当時のル・アーヴルの人口は2万2千人であった。

⁷ 1782年8月24日付の計画書では、このド・セサル案の長所として、水路と港への水の供給の点から、そして商業、海軍、城砦を用いた要地防衛という点から適切とコメントされている。

⁸ ENPC, Ms 4-6528, Lamandé, *Op.cit.*

⁹ *Ibid.*

¹⁰ *Ibid.*

¹¹ ENPC, Ms 3082, Plan du Port du Havre.

¹² Aline Lemonnier-Mercier, *Op.cit.*, 2006, p.62.

¹³ Copie de la lettre écrite par les Administrateurs composant le Directoire du Département de la Seine inférieure, au Comité des finances, le 20 Septembre 1790. この書簡はド・ラ・ミリエールの以下のメモワール内に引用されている。 *Supplément au Mémoire de M. De La Millière, sur le Département des Ponts & Chaussées ; ou Réponses à deux écrits relatifs à ce Mémoire, qui ont paru depuis sa publication*, Paris, septembre 1790.